2008.5
vol.82

国際交流活動ニュース

MACROCOSM

CONTENTS

2 (財) 青少年国際交流推進センター理事長あいさつ/センターの活動　平成20年度を迎え、スタッフ一同、力をあわせて取り組んでまいります
3 第20回「世界青年の船」事業　Friend*ship*, Leader*ship* and Partner*ship*
6 第6回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」　高齢者、障害者、青少年分野の活動家を対象とした派遣と招へいプログラム
9 第2回「国際交流リーダー養成セミナー」　質の良い国際交流プログラムを運営できるリーダー育成を目指して
10 タイ王国・スタディツアー　障がいを持つ子どもや恵まれない子どもたちとの交流プログラムに参加しました！
11 日本青年国際交流機構(IYEO)会長あいさつ・活動方針　「スマイル＆コミュニケーション」大河原友子新会長からのメッセージ
13 第2回SWYAA国際大会東京開催のお知らせ　「世界青年の船」事業の既参加青年が世界各国から日本に参集するリユニオンです。新たなネットワークを作りましょう！
16 お知らせ　ぼくらのために船が出る！夏の「にっぽん丸」クルーズに参加しよう！

(財) 青少年国際交流推進センター　　マクロコズム

財団法人 青少年国際交流推進センター理事長 挨拶

財団法人　青少年国際交流推進センター
理事長　上村　知昭

平成20年度のスタートにあたり、一言ご挨拶をさせていただきます。

当センターが発足して15年目を迎え、この間に、内閣府青年国際交流事業の既参加青年の事後活動組織である日本青年国際交流機構（IYEO）と連携して青年国際交流事業と国際交流を基本とした諸活動を展開し、地域の国際化と人材育成に取り組んでまいりました。

その成果は、内閣府青年国際交流事業のプログラム充実、事後活動団体としてのIYEOの活性化、他団体との連携推進等に表れていると認識しています。

変化が激しく、多様化が進む現代においては、視野の広い対応力のある人材が求められており、そうした人材を育成するうえで、国際交流の場は大変に効果的であると考えます。当センターは、国際交流活動や青少年育成活動を通じて幅広く人材育成に取り組み、広く社会に貢献することを目指しています。そのために、国や地方の青少年国際交流事業に貢献するとともに、日本全国並びに世界に広がるIYEOのネットワークの機能・活動等をバックアップする事務局的機能も果たしつつ、様々な自主事業を展開しています。また、出版物による広報や種々の啓発活動を通じて、国際交流活動のノウハウや有効性について広める努力をしています。

具体的な自主事業としては、子どもたちの視野を広めることを目指して、在日の外国青年を学校に派遣しての「国際理解教育支援事業」、国際交流活動のリーダー育成を目指した「国際交流リーダー養成セミナー」、テーマを定めてのスタディ・ツアーなどを中心に展開し、次の時代を担う青少年の人材育成に力を入れて取り組んでいます。また、当財団の広報誌である「マクロコズム」については、今年度より装いを新たにし、季刊誌として発行いたしますが、従来よりも幅広い範囲からの情報収集等も行い、多彩な内容をお届けしたいと考えていますので、皆様からも積極的な情報提供をお願いいたします。

最後に、改めて国際交流活動並びに青少年活動を推進されている皆様に敬意を表しますとともに、共に力をあわせて社会に貢献できる活動を推進してまいることをお約束してご挨拶とさせていただきます。

(財)青少年国際交流推進センター平成20年度事業計画

1　青少年国際交流事業の企画、実施及び協力

（1）青少年国際交流スタディツアー
地域での国際交流活動に関心と意欲のある青少年を内閣府の青年国際交流事業既参加青年の組織のある各国に派遣し、ホームステイによる交流や訪問国青年の案内による視察、調査等を行う。
年1回　5日間、参加人数10人程度

（2）国際理解教育支援事業
内閣府の実施する青年国際交流事業に参加した在日外国青年等を、国際理解教育に資するため、日本の学校に派遣する。
年10回　派遣人数　各3人程度

（3）内閣府を初めとする国等の実施する青年国際交流事業への協力

2　青少年国際交流に関する啓発及び研修

（1）青少年国際交流全国フォーラム
全国各地域で国際交流に携わる指導者及び青年を対象に、有識者の講演、青少年国際交流活動に関する事例発表・討論等を行う。
年1回　今年度は長野県で開催、参加人数　300人程度

（2）国際理解促進のための指導者養成セミナー
国際理解の促進を図るため、国際交流に携わる指導者の養成を行う。
年1回　東京で開催、参加人数　30人程度

（3）青年国際交流事業報告会
国際交流に関心のある青年を対象に、青年国際交流事業参加者による報告会を行い、国際交流事業への参加を促す。
年3回　東京で開催、参加人数　各150～250人程度

3　青少年国際交流に関する出版物の刊行等

（1）情報誌の刊行
全国の地域や職域及び海外において行われている青少年国際交流活動の紹介などを中心とした情報誌を作成し、一般に配布する。
季刊　　11,500部　1回　2,000部　3回

（2）年報の刊行
全国の地域や職域及び海外において行われている青少年国際交流活動の実施状況など、青少年国際交流に関する情報や資料を収集、整理した年報を作成し、国際交流実施団体等に配布するとともに、政府刊行物センター等において販売する。
年1回発行1,500部

（3）その他
青少年国際交流事業に関連する各種資料を作成し、関係者に配付する。

4　青少年国際交流に関する情報収集及び調査研究

（1）青少年国際交流情報ネットワークの整備
内外の青少年国際交流関係者に関する情報を収集し、コンピューターを活用したネットワークを整備する。

（2）海外における国際交流活動に関する情報収集
関係各国に職員等を派遣し、国際交流に関する情報を収集する。

5　青少年国際交流に関する支援・コンサルティング等

（1）国際交流活動の推進
全国各地域で行われる青少年の国際交流活動を推進する。

（2）青少年国際交流コンサルティング
青少年国際交流事業の実施を希望する団体を対象に、青少年国際交流事業の企画、実施に関する相談に応ずる。

（3）国際ボランティア等に関する情報提供
国際協力、国際貢献に関心のある青少年に対して、国際協力、国際貢献に関する活動団体、活動内容等を紹介する。

第8期財団法人青少年国際交流推進センター　役員名簿

（任期　平成19年4月1日～平成21年3月31日）平成20年4月1日現在

会長	＜故石川会長逝去により空席＞	
副会長	山田　馨司	元総務事務次官
理事長	上村　知昭	元内閣広報官
専務理事	坂田　清一	日本青年国際交流機構顧問
理事	井出　　満	元総務庁統計局長
	大森　　充	元日本青年国際交流機構会長
	川上　和久	明治学院大学法学部長
	木原　光資	東都交通（株）代表取締役社長
	酒井　洋幸	日本青年国際交流機構顧問
	寺下　英明	日本青年国際交流機構顧問
	永山　喜緑	元沖縄開発事務次官
	萩原　節泰	商船三井客船（株）代表取締役社長（平成20. 3. 27就任）
	松尾　弌之	上智大学教授
監事	奥野　照義	日本青年国際交流機構顧問
	久世　　勇	元財団法人公益法人協会専門委員

（五十音順）
（全員非常勤、無報酬）

第20回「世界青年の船」事業

■国内プログラム

第20回「世界青年の船」事業は、日本青年116名と、バーレーン、ブラジル、コスタリカ、フィンランド、インド、ニュージーランド、オマーン、ソロモン諸島、南アフリカ、スペイン、タンザニア、米国、バヌアツから134名の青年が参加して実施されました。参加青年は、平成20年1月から3月にかけて、"Friend*ship*, Leader*ship* and Partner*ship*"のスローガンを掲げ、約50日間にわたり、日本国内、船内及び各訪問先で活動を行いました。

プログラム

1月15日	外国参加青年来日
1月16～23日	日本国内プログラム 都内視察、課題別視察、地方プログラム（宮城県、茨城県、山梨県、富山県、徳島県、香川県）、出航前研修、国際連合大学訪問
1月24日	日本（横浜）出航
2月11～13日	オマーン（マスカット）訪問国活動
2月19～22日	インド（チェンナイ）訪問国活動
3月5日	日本（晴海）帰港　外国参加青年離日

▲浅草の商店街で着物を羽織るバーレーン参加青年（都内視察）

▲KTC中央高等学院にて、生徒に各国の紹介をする外国参加青年（課題別視察／異文化理解コース）

埼玉県小川町を訪問し、日本における有機農業の歴史や霜里農場での有機農業の取組を視察（課題別視察／地域社会と青年コース）▼

◀歓迎会でインド、南アフリカ、米国の参加青年を紹介（地方プログラム／宮城県）

訪問最終日のフェアウェル・ティー・パーティーで、ホストファミリーや地元青年とゲームなどを通じ、最後の時間を楽しむ（地方プログラム／富山県）▶

ボランティアスタッフ・ホストファミリーのコメント

■青年たちがとても明るく真摯な態度で接してくれた。（都内プログラム）

■初めてこのような機会に触れたので、これからもっといろいろな事業に参加してみたいと思った。（都内プログラム）

■発展途上国と経済先進国の青年が同じ席につき、真剣に意見交換する様子は、実社会ではなかなか見ることのできない大変貴重な瞬間ではないだろうか。互いの立場を理解し受容した上で、自国の将来を担う青年たちの学ぶ意欲や高い志を肌で感じ、とても触発された。（課題別視察・ボランティアコース：財団法人オイスカ訪問）

■日本の視覚特別支援学校（盲学校）の現状から、今後の国際交流、研究交流のことまで、積極的な質問が出た。盲学校の見学は初めてで、今回の訪問で日本の盲学校教育の概要を知ることができた。特に障害を持つ子どもたちへの教育機会と費用の補填を公の税金で保障することの意義について改めて認識した。（課題別視察・教育コース：筑波大学附属視覚特別支援学校訪問）

■高校生の娘がいつか自分も「世界青年の船」事業に参加したいと言っている。二泊三日の貴重な文化体験ができた。（ホストファミリー）

■ホームステイを通じてお互いの国の理解を深め、人間としての気持ちは万国共通ということを実感した。（ホストファミリー）

■船内活動

▲コース・ディスカッションで、指導官よりメディア領域におけるグローバリゼーションについて学ぶ（情報・メディアコース）

各国の文化紹介（ナショナル・プレゼンテーション）でバーレーンが伝統的な結婚式の様子を披露▼

▲フリー・ディスカッションでは、参加青年がテーマを決めてディスカッションする

スポーツ&レクリエーションで、日本参加青年と外国参加青年が一緒に綱引きを体験▼

■訪問国活動

オマーン

▲オマーン女性連盟で、関係団体代表者による講義を受け、オマーンにおけるNPO活動について学ぶ(異文化理解コース)

オマーン環境社会でマングローブ
▼植林について学ぶ(環境コース)

▲ボーイスカウト総局での活動について学ぶ(ボランティアコース)

インド

▲チェンナイ市にある老人ホームを訪問し、地域での活動内容を学ぶ(地域社会と青年コース)

歓迎レセプションにて、参加青年全員でチャリティー・イベントをして集めた寄付をバラ・マンディール代表
▼に渡す

▲タンダラン村を訪問し、地元の人々と交流を深める

第20回「世界青年の船」事業
日本参加青年　鈴木　理恵

1月24日、13か国からの外国参加青年と日本の参加青年、約250名で42日間の「世界青年の船」に大きな期待と不安を持って乗り込んだことを思い出します。

以前、「世界青年の船」事業の都内プログラムにボランティアとして参加したことでこの事業を知り、参加青年との交流を通して、更に彼らと船に乗り、時間を共有して、より深くお互いを知り合い、異文化交流を通して世界を小さくしたいという気持ちで参加を希望しました。反面、これだけのバラエティーに富んだ文化、環境、言語、宗教のバックグラウンドを持った大勢の各国青年たちとの相互理解に十分なほどの語学力や知識に自信がなく、不安もありました。

実際、コース・ディスカッションにおいて、発言者の意見を聞き取ることができず、自分の発信も困難な場面では大変苦労しました。しかし、そんな時にも助けてくれる仲間に支えられ、またプログラムや、それ以外の時間を使ってじっくりと議論ができた時、文化や国や言語の違いを越えた一個人同士として交流できたと感じ、前向きな自信につながりました。価値観の違いは、国や文化、宗教などによるものではなく、また、予測や想像ができることでもなく、本人から直接聞くことによって知ることができるということを理解しました。それは私が不安に思っていた、この事業参加者の規模の大きさと多様性が可能にした、私にとっての大きな学びです。

これから様々な場面で、個人との理解を更に深めたり、つながりを築いたりするためにも、語学や文化的知識と同時に価値観の尊重という部分を増やしていきたいと思いました。

個人旅行や短期留学、ましてや日常生活では体験することのできない、世界の縮図とも言える貴重な空間での共同生活では、必ずしも乗り越えられたことばかりではなかったのも事実ですが、42日間はあっという間に過ぎてしまいました。この貴重な体験で学べたことをいかし、気づくことができた課題に向き合い、これから自分にできる社会貢献や、社会とのつながり方をじっくり考えて活動していきたいと考えています。

第20回「世界青年の船」事業を記念して様々な記念イベントを企画運営してくださった皆様、プログラムを安全第一で遂行してくださった管理部の皆様、共にプログラムを過ごした仲間、そしてすべての関係者の皆様に感謝致します。すばらしい機会をありがとうございました。

第20回「世界青年の船」事後活動連携強化プログラム

2008年2月20日～27日、日本青年国際交流機構の代表3名が、事後活動連携強化プログラム担当者として第20回「世界青年の船」事業のインドーシンガポール区間において事後活動セッションを実施した。

▲日本青年国際交流機構の代表者がクイズ形式など趣向を凝らした方法で事後活動セッションを運営

▲小グループでのワークショップの中で、これまでの活動を振り返り、今後の取組について話し合う

「世界青年の船」事後活動連携強化プログラム派遣日程

月日	日　程
2月20日（水）	派遣者インド、チェンナイ到着 第20回「世界青年の船」事業参加青年と合流
2月21日（木）	事後活動連携強化プログラムの準備 インド事後活動組織との打合せ 第20回「世界青年の船」事業参加青年との合流
2月22日（金）	第1回事後活動セッションの準備 事後活動連携強化プログラムの準備／出航
2月23日（土）	【第1回事後活動セッション】 事後活動連携強化プログラム
2月24日（日）	第2回事後活動セッションの準備 事後活動連携強化プログラム
2月25日（月）	【第2回事後活動セッション】 事後活動連携強化プログラム 振り返り
2月26日（火）	シンガポール着／出航 派遣代表者　帰国
2月27日（水）	派遣代表者　日本着

第20回「世界青年の船」事後活動連携強化プログラム　派遣者として

第13回「世界青年の船」事業参加青年
滋賀県青年国際交流機構　副会長
寺西　由佳

事後活動連携強化プログラムの担当として、再びにっぽん丸に乗船し、地方を活動拠点としている既参加青年の代表として、自身の経験・活動事例を参加青年たちに発表する貴重な場をいただいたことは、今まで培った自身の経験を振り返るとともに、気持ちを引き締め、新たに活動意欲がかきたてられる経験となりました。また、細く長く続けてきた様々なことを自覚し、継続して一つの活動に取り組む楽しさ、大切さ、そこから広がるつながりなどを軸に参加青年に発表をすることができました。それと同時に"Think Globally, Act Globally & Locally."ということをアピールし、地域での活動、そして継続して活動をすることの大切さを伝えました。

船上では、事後活動の紹介、ワークショップ、ディスカッションなどを盛り込んだ公式のセッション以外にも、様々な活動を行いました。参加青年と個別に話す時間を設けたSWY Café（意見交換会）では、ある女性の参加青年が、「今後は、私たちでIYEOを盛り上げて、壮行会等を企画しようと思います。一緒に事業やイベントもできたらいいですね」と声をかけてくれたのが印象的でした。そのほか、プログラムが残り10日に迫り、青年同士が別れを惜しみつつある中で、前向きに下船後の活動について触れてくれる参加青年がいるということも非常に嬉しく、この言葉だけで、私たち3人が乗船した意味が十分あったと実感しました。

乗船中に話をした青年には、「本当の交流は船を降りてから」ということを幾度となく伝えました。これは、実際私も経験したことでもあり、また今後の自分にも言い聞かせている点でもあります。今回の経験を通じてますます意欲的に活動していきたいという気持ちになると同時に、再度原点に立って、これから自分は何ができるのか、地域のためにどのような支援をしていけるのかを考えるすばらしい機会となりました。

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（以下、既参加青年会議）

既参加青年会議は、2008年3月16日～21日の日程で開催された。バーレーン、エジプト、ギリシャ、インド、ケニア、オマーン、セイシェル、スリランカ、スペイン、スウェーデン、タンザニア、イエメンの12か国からの会議代表者のほか、日本青年国際交流機構の会議代表者、実行委員、事務局スタッフが会議に参加した。

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）の担当者と懇談

様々な活動について、熱心な話合いが続いた

フェアウェル・ランチ・パーティーでは、内閣府担当者やこの日参加した既参加青年に対して、会議の成果発表を行った（写真は当日の参加者）

月日	日程
3月16日	会議代表者　来日
3月17日	会議 1 ー議題 1 会議 2 ー議題 2, 3 ○SWYAA国際大会　　○広報活動 歓迎レセプション　（会場：都内ホテル）
3月18日	会議 3 ー内閣府訪問 ○内閣府代表との懇談 会議 4 ー議題 4, 5 ○選考について　　○ネットワーク作り
3月19日	会議 5 ー議題 6 ○社会貢献活動と国際ネットワーク 1.「世界青年の船」20周年記念事業 2. SWYAA共通活動 会議 6 ー議題 6 ○社会貢献活動と国際ネットワーク（継続）
3月20日	会議 7 ー議題 7 ○そのほかの議題 ○議事録の確認と承認 フェアウェル・ランチ・パーティー
3月21日	会議代表者　帰国

既参加青年会議では、様々な事後活動について活発な意見交換を行い、その結果、以下のプロジェクトについて、各国で取り組むことに合意した。（議事録より抜粋。詳細はホームページを参照。http://www.swyaa.org/conference/2008/2008_Index_E.htm）

■「世界青年の船」20周年記念事業

1. 20周年記念事業：一日イベントの開催

SWYAAの強いネットワークの存在や事業の経験を地域や国際社会に広めるために、各国の事後活動組織が記念事業を実施する。

一日イベントの活動例

- SWY博覧会
- 展示会
- 日本文化イベント
- フードフェスティバル
- 学校訪問
- セミナー、講義
- 老人ホーム訪問
- 福祉施設訪問

2. 環境への取組：「世界青年の船の森」植林プロジェクト

環境保護活動として、日本では50万円の寄付を募り、およそ0.3ヘクタールの「世界青年の船の森」を作ることを目標とする。また、世界各国でこの活動に取り組むことで、温室効果ガスによる地球の温暖化のスピードを遅らせると同時に、森を再生し、美しい水を供給する。

■「世界青年の船」事後活動組織 共通プロジェクト

1. 教育支援プロジェクト：One More Child Goes to School

スリランカの子供たちが高校まで就学できるように奨学金の付与や学校用品の提供を行う。また、今後このプロジェクトを発展させるために必要な情報共有を行う。

2. ホームステイ・プラス・ワン

ホームステイだけで休暇を過ごすのではなく、地域社会の活動に携わり、ボランティア活動をする機会や専門的な技術を磨くことにつながる国際的かつ文化的な経験をする機会を設けることを目的とする。

短期プロジェクトの例（1日～数日間）

- 学校訪問や異文化理解の授業を企画・実施
- 社会問題に関するイベントやフォーラムに参加
- 施設訪問（例：老人ホーム、特別支援学校、NGO）

長期プロジェクトの例（一週間～数か月）

- NGOや企業でのインターン又はボランティア活動への参加（例：清掃活動、献血）
- 訪問国事情や異文化理解促進のための記事を書く

3. ユース・リーダーシップ・プロジェクト

青年のリーダーシップの養成、就業に関する意見交換の場を設ける。専門分野について情報交換をする中で、専門家からの助言やフィードバックを得る。

小規模プロジェクトの例

- 他団体の協力を得てフォーラムを企画・実施する
- リーダーシップ養成のための情報交換の場を設ける

大規模プロジェクトの例

- 国際会議を企画・実施する
- 特定のテーマで連続したセミナーを企画・実施する

第6回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」

平成14年度に開始された青年社会活動コアリーダー育成プログラム（以下、コアリーダー事業）では、高齢者、障害者及び青少年の各分野において社会活動の経験がある青年を日本から海外へ派遣し、また他国で社会活動の重要な役割を担っている民間組織の青年リーダーを日本へ招へいするという相互の交流を通じ、（1）社会活動の青年コアリーダーの能力の向上、（2）相互のネットワークの形成を図っています。

平成19年 11月4日～13日	派遣事業 ● 派遣先：スウェーデン（高齢者分野、9名）、ニュージーランド（障害者分野、9名）、イギリス（青少年分野、8名） ● 招へい青年を受け入れる府県からの派遣者は、招へいプログラムの各種実行委員として受入れに協力

平成20年 2月5日	招へい青年来日 ● 招へい国（分野混在）：ニュージーランド（13名）、スウェーデン（13名）、イギリス（13名）
2月6日	開会式・オリエンテーション・行政官講話・歓迎会 ● 日本のNPO事情及び各分野の現状について、行政官による講義を実施
2月7日	課題別視察 ● 各テーマの専門施設を訪問し、実際の現場を視察及び関係者との意見交換を実施 【NPO 運営における評価コース】 AM：①特定非営利活動法人ケア・センターやわらぎ／複合福祉施設やわらぎホーム・西立川 ②社会福祉法人にんじんの会／西恋ヶ窪にんじんホーム PM：中央労働金庫 【人材確保・人材育成コース】 AM：特定非営利活動法人エティック PM：特定非営利活動法人国際自然大学校訪問 【地域・企業・行政との連携コース】 AM：日本電気株式会社 PM：社会福祉法人賛育会／中央区立特養マイホームはるみ
2月8日～10日	NPOフォーラム ● 日本の各分野のNPO団体関係者とともに、コアリーダーの育成及びNPOの活性化についての討議を実施
2月10日	地方プログラムオリエンテーション
2月11日	自主研修
2月12日～17日	地方プログラム ● 各分野（コース）に分かれ、コーステーマに沿ったプログラムを実施 関連施設を訪問し、NPO及び各分野の関係者と共に地方セミナーを実施 【高齢者分野】福井県：生きがいのある高齢者の生活 【障害者分野】熊本県：障害者（身体障害者）の社会参加のための支援 【青少年分野】大阪府：ユースワーカーの育成の在り方
2月18日	コース発表会・評価会・歓送会
2月19日	招へい青年帰国

2月6日の開会式であいさつする
ニュージーランドの参加者

認知症ケアのグループホームを訪問

高齢者分野＜福井県＞

招へい青年からの報告

スウェーデン団長　Dr. Jonas Sandberg

Leaving Sweden for a two-week visit in Japan in February 2008, not knowing what to meet or experience, stands out as one of the most interesting weeks in my career so far. When I met with the Swedish group at Kastrup International Airport, we were all very excited but yet unprepared for what we would take part of. As a leader for the Swedish group, I tried to inform the delegates about some previous experience from Japan but, most of all, I informed them not to worry, "we will be well looked after…". And yes, from the first steps on Japanese soil, we were met with kindness and friendship. My first impression when meeting the organising committee was that everything was extremely well organised down to the smallest detail. This impression lasted for the whole visit. But, most of all, the hospitality that we were shown stands out the most. You were all incredible.

If I try to describe what I have gained from the program, from a personal but also from a professional perspective, one thing stands out foremost namely, the willingness to share. Even though interpretations had to be used and our cultural diversities sometimes made it hard to understand what was going on, all the questions and

日程	プログラム
2月12日（火）	県庁表敬、県政概要、歓迎会
2月13日（水）	社会福祉法人光道園
2月14日（木）	財団法人松原病院
2月15日（金）	有限会社ほっとリハビリシステムズ、地方セミナー、フェアウェル・パーティ
2月16日（土）	コース評価会、ホームステイ

2008年2月、母国を離れ日本を訪れたこの2週間は、私のこれまでの職業人生の中で最も興味深い時間となった。出発に際し、スウェーデンの参加者が集合した空港で、私たちは皆これから参加するプログラムに期待をいだきながら、まだ日本で何が起こるのか分かっていなかった。スウェーデンの団長として、私は参加者の皆に過去の参加者からのアドバイスを伝えたが、そのほとんどは「大丈夫、日本の皆さんがよくしてくれるから」というものだった。そして、まさにそのとおり、日本に到着した第一歩から、私たちは多くの親切と友情に出会うこととなる。私のこのプログラムの第一印象は、すべてが細部にわたるまで非常によく準備され運営されている、ということだった。この印象はプログラムの最後まで変わることはなかった。日本の皆さんのおもてなしの心は、まさに信じがたいほどであった。

このプログラムから何を得たかと言えば、個人的にも職業的観点からも、「共有する意欲」を第一に挙げたい。お互いのことばの壁や文化の違いが時に障壁となるにもかかわらず、私たちのすべての質問や関心に、訪問先の

concerns were met with an open mind. Everyone was willing to share both information about organisations and caregiving, but also openly discuss problems and issues around care practice.

Your willingness to share could be concluded in one single event, namely the homestay. It allowed me to share Japanese life for 24 hours something I would never get as a tourist. The homestay in Fukui gave me a lot to think about, and since my return I have many times looked back on this event and shared it with friends and colleagues. Somehow the homestay experience concludes the whole program. Having the opportunity to share life concerns, life values, personal experiences, joys and sorrows with people living in a different part of the world and to realise that we are very much alike have had a strong impact on me. Japan might seem far away from Sweden but after my visit I have come to realise that it is not.

So, what have happen after the program? There is always a risk in that taking part in those kinds of event are isolated and have no "after life". Based on earlier experiences of conferences around the world I also suspected that the visit in Japan would only remain in my own memory. But due to the technical innovation called 'Facebook' I still discuss and share ideas with the delegates from the program. We have formed an alumni group where most of the delegates and the Japanese hosts are members. Many of my new found Japanese friends are sending messages and photos from our visit and we discuss both private and professional concerns. Also, I have been able to share my research work with members from both Japan, UK and New Zealand and within a couple of weeks I will meet with members from the UK delegation.

In conclusion, I am mostly thankful for the opportunity to have been a delegate in the FY2007 Young Core Leaders of Civil Society Groups Development Program. Even though I have not eaten rice since I returned home, in my mind I have already started to plan for my next visit. You have all made a very strong impression.

All the best till we meet again!

歓迎会であいさつをする筆者

皆さんは広い心で答えてくださった。組織や介護に関する情報を共有してくれるだけでなく、日々の現場で抱えている問題についても積極的に議論をしてくださった。

この「共有する意欲」を最も強烈に感じたのは、ホームステイであった。わずか約24時間というホームステイであったが、観光客として扱われることはなく、日本の日常生活を共有させていただくことができた。ホームステイ体験からの学びは多く、スウェーデンに帰国した後も、ホームステイ体験を振り返り、友人や同僚に話をしている。世界の反対側に暮らす人々と、日常生活における関心事や価値観、個人的な体験、楽しみ、悲しみなどを共有することによって、私たち人間は非常によく似ているという印象を強くした。日本はスウェーデンから非常に遠いかもしれないという印象を持っていたが、実際に日本を訪問した後は、その印象が違っていることに気づいた。

では、プログラム後には何が起こっているだろうか。このようなプログラムによくあることは、プログラムが前後の日常生活から切り離された経験となり、何の事後活動もないということである。私がこれまでに世界中の多くの会議に参加してきた経験から言っても、今回の日本でのプログラムの経験は自分の記憶の中に残るだけだと思っていた。しかし、現在は「Facebook」という便利なツールがあり、私たちは今でも同じプログラムに参加した各国の参加者たちとのインターネット上での議論や意見交換を続けている。各国の参加者たちや、日本で出会った皆さんたちとの同窓会グループを作っているのである。日本で出会った皆さんは、今でもメッセージや写真を送ってくれ、個人的なことから専門的な関心事まで話し合っている。私自身の研究成果を日本・イギリス・ニュージーランドの参加者と共有し、また、実際に数週間後にはイギリスの参加者と再会する予定となっている。

私は、このプログラムに参加できたことに大変感謝している。帰国後にはお米を食べる機会はないけれども、すでに心の中ではいつまた日本を訪問しようか、と考え始めている。それほど日本で得た印象が強かったのである。

また再会する日まで！

障害者分野<熊本県>

「踏み出した一歩が気づかせてくれたこと」

熊本県受入実行委員　西田　香菜子

平成18年に第33回「東南アジア青年の船」事業に参加し、数え切れない程の学びと出会いを得た私は、プログラム終了後の1年は事後活動の大きな一歩として取り組むことを心に決めていた。

そして、今年2月、平成19年度「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」が実施された。私の生まれ育った熊本での地方プログラム受入れは、少し踏み出していた事後活動への一歩を広げるチャンスとなった。

熊本では、障害者分野で受入れを実施し、「障害者（身体障害者）の社会参加のための支援」を大きなテーマとし、障害者支援施設の視察、地方セミナーでのディスカッション、1泊2日のホームステイが6日間の日程で行われた。

私たち実行委員は、プログラム実施の半年前の昨年8月より活動を開始。実行委員会の取りまとめ役である総括を筆頭に、企画・調整班、レセプション班、ホームステイ・写真記録班と、大きく4つのグループに分かれて準備に取り掛かった。

日程	プログラム
2月12日（火）	県庁表敬、県政概要、歓迎会
2月13日（水）	社会福祉法人大輪会　障害者支援施設「つばき学園」及び就労継続（B型）事業所・自立訓練事業所「野ばら」
2月14日（木）	熊本市社会福祉協会「熊本授産場」、熊本県社会福祉事業団「熊本県くすのき園」
2月15日（金）	熊本県立ひのくに高等養護学校、地方セミナー、フェアウェル・パーティ
2月16日（土）	ホームステイ

ホームステイ班だった私の主な役割は、ステイ先の確保、外国参加者とホストファミリーとのマッチングである。外国参加者の宗教、職業、趣味、アレルギー・障害の有無を考慮した上で、外国参加者とホストファミリーがより良い2日間を過ごせることが大前提。しかし、外国参加者の詳細については、プログラム直前まではっきりと分からなかったため、受け入れてくださるご家族には、その旨を理解していただいた上で協力をお願いしなければならなかった。外国参加者にとって、できるだけ過ごしやすい環境でのホームステイをと最後まで調整が続けられた。

そうして迎えたホームステイマッチングで外国参加者とホストファミリーが顔を合わせると、会場は一気に和やかな雰囲気に包まれた。会場を後にする頃には、数日間で距離が縮まった実行委員と話す間もなく、ホストファミリーとの交流を楽しんでいるようで、ほっ

と胸を撫で下ろす思いだった。体調を崩し早めにホームステイを終えた人もいたが、大きな問題も起きず、無事に日程を終えることができた。

ホームステイ班として、そしてレセプション班、企画・調整班として十数人のスタッフで慌しく運営した実行委員も、実際にプログラムが始まると外国参加者との交流を楽しむことができた。私個人としては、ホストファミリーとして受け入れたイギリスからの参加者と、福祉だけでなく社会や未来について語ることができたのは、本当に嬉しかった。また、障害を持つ参加者と、同じ世界を生きる「障害者」と「健常者」について、彼の大好きなケンタッキーでフライドチキンを頬張りながら互いに意見をぶつけ合うことができたのは一番の思い出である。国際交流という一つの言葉では表現できない、深い絆をまた一つ心に刻むことができたように思う。

筆者の自宅にホームステイしたイギリスの参加者とともに

このプログラムにかけた約半年の時間の中で、日々実感として心に残った想いはやはり、2年前に参加した「東南アジア青年の船」事業へと繋がっていった。短くも長くもある人生の中で、数少ない転機の一つともいえるすばらしいプログラムの裏には、多大なる尽力が大きな柱となっていたことを、身を持って感じた。プログラムに参加する側から、運営する立場を経験して初めて分かる大変さとありがたみ。とは言え、実行委員自体もそれぞれの役割をスムーズにこなしていくために、縁の下の力持ちとなって下さった多くの方々に感謝しなくてはならない。参加する側も運営する側も必ず誰かの支えがあってこそだということを痛感させられた。

今回の地方プログラム受入実行委員を通して、熊本県IYEOの結束もさらに強いものとなった。一人ひとりが継続的に高い意識をもって、今後の活動に向け切磋琢磨していきたい。そして、私自身も踏み出した大きな一歩を、さらにもう一歩前に繋げていこうと思う。

青少年分野<大阪府>

イギリス派遣と受入れで学んだこと

平成19年度
「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」
派遣プログラム(イギリス)参加青年
大阪府受入実行委員
NPO法人日本教育開発協会(ＪＡＥ)理事長
山中　昌幸

日程	プログラム
2月12日（火）	府庁表敬、歓迎会
2月13日（水）	特定非営利活動法人日本教育開発協会、大阪市立加美南中学校訪問
2月14日（木）	特定非営利活動法人関西こども文化協会
2月15日（金）	地方セミナー
2月16日（土）	ホームステイ、歓送会

昨年11月にイギリスを訪問、今年の2月には外国参加者の受入れを通して「ユースワーカー」について学びました。訪問、受入れを通して学んだことは大きく三つあります。一つは世界へと視野が広がったことです。二つ目は、同じNPO分野で、海外でもより良い社会を創っていこうという同志にめぐり合い、今の活動の励みになったことです。三つ目は、支援者だけで支援策を考えるのではなく、当事者を入れた支援策を考えることです。

一つ目の視野が広がった点についてですが、私自身学生時代を含めて海外に2年間住んでいたことがありますが、今回の訪問そして受入れでは、別の意味で視野が広がりました。イギリスでは青少年支援のNPOを中心に回ったのですが、企業と協働でのプログラム作りや、若者の主体的市民性を育むための全国的なキャンペーンの実施、政治家への働きかけなどをしているところがありました。日本と同じような社会課題に対して、日本でも大いに参考になる手法を取り入れた活動をしていて多くのことを学びました。

二つ目の活動の励みになった点ですが、訪問先での、また、受入れの際のディスカッションを通して、海外のNPOスタッフ一人一人の考え方に接し、資金調達をどうするか等、同じような悩みを持っているのだと感じました。いろいろな課題に直面しながらも社会をより良くしていこうという想いは一緒で、国境を越えた同志にめぐり合い、私たちもがんばっていこうと励みになりました。

三つ目の当事者も巻き込んで支援策を考えていく点は、一つ目の視野が広がったことの一つとして具体的に学んだ手法です。私たちの団体もそして他の団体もそうだと思いますが、日本のNPOの場合、支援策を支援者だけで考えがちです。しかし、海外ではそれはまったく意味がなく、支援策を考える際は必ず当事者を巻き込んで行います。例えば、ある青年支援のNPOは、サービスの受益者である若者を必ず理事に入れていました。この点は反省し、受入れが終わったあと早速、私たちの団体でステークホルダー・ミーティングを初開催し、当事者である若者、子どもの保護者、そして学校の先生、行政、企業経営者など現在の関係者を入れて、次年度の内容に関して会議を行いました。結果、私たちスタッフで考える以上の良いアウトプットがありました。また、現在ある大企業のCSRをお手伝いしているのですが、そこでも提案したところ、早速当事者を巻き込んで会議を行うことができました。この内容はこの企業の今年度のCSR報告書に掲載される予定です。

さて、大阪での受入れの際には、私たちの団体が受入れを行ったのですが、参考までに受入れの準備について紹介したいと思います。一番良かったのは、私たちの団体が受入れに当たって目的をはっきりさせたことだと思います。スタッフ内で今回の受入れの目的と外国参加者から何を学びたいのかを話し合い、明確にしました。話合いをしっかりしたおかげで、期待以上のものを学べました。余談ですが、外国参加者と仲良くなり、私たちスタッフは、彼らが東京に帰る前日に夜中までカラオケで交流をしました。彼らと仲良くなったのもしっかり準備したおかげかもしれません。

今回、私自身もそしてイギリスを一緒に訪問した仲間も、そして受入れに携わった私たち団体のスタッフも大いに学ぶことができました。実際に学んだことを少しずつですが、実践して成果を上げています。訪問と受入れをさせていただいて本当に良かったと思います。今後も派遣メンバーそして外国参加者とのせっかくできたご縁をつなげて今後の活動にいかしていきたいと思います。あらためて関係者各位にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

JAE訪問(筆者最後列右から4番目)

第2回「国際交流リーダー養成セミナー」

平成20年3月22日(土)～23日(日)、(財)青少年国際交流推進センター主催の第2回「国際交流リーダー養成セミナー」を国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催しました。北は秋田から、南は鹿児島までの全国各地から国際交流員、学校教員など指導的立場の方を中心に20名の参加者を得て、基調講演、分科会、グループ活動などを実施しました。

第2回「国際交流リーダー養成セミナー」開催にあたり、第1回に好評をいただいた2つのポイントについて、さらにパワーアップをしました。1点目は、知識としてのインプットを提供しつつ、参加者がそれを吸収したうえでアウトプットできる場面を増やしたことです。このセミナーの構造自体からも、50%以上が参加者の主体的な参加によって成り立っているのが見て取れます。2点目は分科会、グループ活動、また夕食交流会の時間も使い、参加者をシャッフルすることで、多くの人と知り合い意見交換ができるよう工夫したことです。それぞれの場で経験を積んだ参加者が集まることで、お互いに学ぶことが大きな刺激となりました。

3月22日(土)	10:00-10:20	開講式・オリエンテーション
	10:20-12:00	<基調講演>「国際交流における異文化コミュニケーション」 麗澤大学外国語学部教授　町　惠理子
	13:10-14:30	<企画者としての心構え> (財)青少年国際交流推進センター 事務局長 大橋　玲子
	14:45-17:45	<分科会> ・「プログラムPR&企画術」 (財)大阪府青少年活動財団　主幹　赤木　功 ・「会議術(ファシリテーション)」 (財)青少年国際交流推進センター プログラムコーディネーター　椿　景子
	19:45-21:45	<グループ活動>
3月23日(日)	8:45-9:45	<分科会>
	10:00-12:00	<グループ活動>
	13:20-14:00	<グループ発表>
	14:00-14:30	振り返り・アンケート記入
	14:30-15:00	総括・閉講式

町惠理子教授による
基調講演

赤木功講師による分科会
「プログラムPR&企画術」の様子

夕食交流会で行った
コミュニケーション・ゲーム

「新しい韓国にアンニョンハセヨ!」という
企画を発表したグループ

国際交流事業における基本的認識

<本稿は、(財)青少年国際交流推進センター大橋事務局長による「企画者としての心構え」の講演から、「安全な事業運営のために」(安全管理は総合力)の一部分をまとめたものです。>

国際交流事業とは「人を扱う」事業です。企画・運営側は責任を負う立場ですから、自分の提供するものに自信を持たなければならないと同時に、参加者からの様々な意見に耳を傾けるというような謙虚さも必要です。交流とは、コミュニケーションの場ですから、相手に何かを伝えるためには、相手が言うことを受け入れるゆとりが必要です。企画側は、常に気持ちにゆとりを持って取り組む姿勢が大事です。この点を基本にして、次の5つを認識して事業に取り組んでください。

「一般社会と同じ」・・・「国際交流事業」の舞台というと、すばらしい人たちの集団、特別な社会のように思いがちですが、様々な人たちがいろいろなところから集まって構成しているという点で、普通の社会と同じです。盗難やケンカ、事故も起こりえます。当たり前のことなのに、私たち国際交流事業関係者は、この認識が弱く、忘れがちです。

「個人を超えた国の問題」・・・国籍の異なる人たちが集まると、問題がない時には個々人として対応しているわけですが、問題が起きると、「日本は」「自分の国は」といった国を主張することになりがちです。日本在住の方であってもあり得ることですが、特に、外国から招へいする場合、大使館との連携を認識する必要があります。最低限、在日本の招へい国大使館の連絡窓口は確認しておきましょう。

「価値観のちがい」・「文化・習慣のちがい」・・・人種や宗教・言語などが異なると、同じものを見聞きしても、異なる捉え方や発想がされます。それが具体的に現れるのが、文化・習慣のちがいです。例えば、あいさつの仕方を見ても、お辞儀、握手、鼻と鼻とをつける国もあります。このように「価値観のちがい」が影響し、形が変わって「文化・習慣のちがい」として出てきていますから、知らない間に互いにミスコミュニケーションを起こしていることがあります。

「非日常の体験」・・・国際交流事業とは、擬似国際社会を作り出しているわけですから、参加者は普段の生活では体験できない場面に足を踏み入れることになります。しかし、そういう状態にあると本人が認識していないことが多く、企画側は、自分たちが作り出している場面が参加者にどのような影響を与えているのかという点を認識しておく必要があります。日頃とは違う言動をする人がいても、特別な場所に来て少し興奮しているのではないかというような配慮も含め、バランスをとって対応してあげる必要もあるでしょう。

国際交流事業を企画する際には、上記のような点を認識しておけば、ハプニングが起きた時に、起きた理由に容易にたどり着くことができ、それが適切な解決方法を迅速に見つけ出すことに繋がります。

「安全管理は危機管理の原点」

もう一つの大切な認識は、トラブルを起こさないようにするということです。しかし、トラブルを起こさないために細かな決まりで縛っては意味がないのが交流プログラムです。規則を最小限にするためには、十分な準備と備えが大切です。最も大切なのは、運営側はもちろんのこと、参加者も含めた関係者の事業への理解と共有意識です。事業のねらいとよき場にしていこうとの共有意識と様々な具体的準備によって、自由で効果的、かつ安全な事業が成り立つのです。

非常時の対応<パニックの回避>

1.最優先事項・目標の確認
2.大局的な判断
3.客観的な分析
4.冷静な対応
5.デマに惑らない／デマに加担しない

⇒ 独自の判断・行動をせず、管理者に報告・連絡・相談

「現場総括責任者としての対応」

残念ながら事が起きてしまったら、まず、自分の頭の中を平常時から非常時に切り替えましょう。通常は、様々な価値観を比較しながら判断しますが、非常時には、参加者の安全を最優先にしつつ、最短時間でことを成すことを目指して、取り組む優先順位を考えながら状況に応じ対応を切り替えます。指示命令系統は、トップダウンになりますが、上からの指示にスムーズに従う体制もチームワークです。人心の安定を図るために、それぞれの心情を把握し、声をかけてコミュニケーションを図りましょう。

「学び」と「実践」のセミナーに参加して

財団法人鹿児島県国際交流協会　鈴木　由美子

「国際交流事業をもっと有意義に、また価値あるものにしたい」という思いから今回のセミナーに参加しました。

基調講演・分科会での「学び」、交流会での「情報交換」、グループ活動での「実践」など様々な「場」を提供していただき、講師の方々や参加者から多くの刺激を受け、これまでよりもさらに視野を広げることができました。

特にグループ活動は、セミナーで学んだ「会議術(ファシリテーション)」と「企画術」の2つのスキルを早速問われる内容で、大変印象に残る活動でした。学んだことをすぐに実践に移さなければいけない状況に、戸惑う参加者も多かったと思いますが、講師からの助言や参加者同士の真剣な議論によって、グループごとに有意義な活動につなげることができたのではないかと思います。

セミナー全体を通して、これまでの自らの事業の組み立て方や運営方法を振り返り、長所や欠点を再確認できる貴重な機会を得ることができました。様々な場面で学んだことや得ることのできた多くのヒントは、今後の企画立案や運営の際に大変役立つと思います。また、今回得た知識は他の職員とも共有し、様々な事業に反映させていきたいと思います。

最後になりましたが、貴重な機会をご提供いただいた、講師の方々、参加者の皆様、今回のセミナーの主催者の皆様に、改めて感謝いたします。

筆者中央右側

タイ王国・スタディツアー

（財）青少年国際交流推進センターでは、今年3月、自主事業として「タイ王国・スタディツアー」をはじめて実施しました。大学生を中心に全国から集まった参加者11名は、タイ・ラヨーン県で行われた青少年健全育成プロジェクト「For Hopeful Children Project (FHCP) 2008」にボランティアとして参加し、プロジェクト実行委員と協働しました。

また、FHCP参加団体の児童養護施設で、カーンチャナブリー県に位置するMoo Baan Dek（ムーバーンデック）とDhammanurak House（タンマヌラック）を事前訪問し、子どもたちと生活・活動することを通じて、交流を深めました。ムーバーンデックは、型にはまった教育方法でなく、愛国心を大切にした教育を実践し、自由と生徒自身による自治を基本とした教育スタイルを提唱しています。タンマヌラックでは、さまざまな理由により両親のいない家庭出身の子どもたちや、育児のできない家庭出身の子どもたちを尼さんが世話しています。その約7割は山岳地域やミャンマーとの国境地域で生まれた少数民族の子どもたちです。

月日	活動内容	場所
3月18日（火）	バンコク集合	バンコク
3月19日（水）	タイ受入れスタッフを交えた事前ミーティング FHCPボランティアスタッフとの交流夕食会	
3月20日（木）	カーンチャナブリーへ移動 クウェー川鉄橋（戦場にかける橋）視察 植樹（日タイ友情の樹）	カーンチャナブリー
	カーンチャナブリーでの活動	
	ムーバーンデックにて子どもたちと交流 ムーバーンデック滞在（2泊）	
3月21日（金）	カーンチャナブリーでの活動	
	タンマヌラック訪問（施設見学、子どもたちと交流） ムーバーンデックにて子どもたちとの交流夕食会・文化紹介	
3月22日（土）	ラヨーンへ移動	ラヨーン
	FHCP2008	
	開会式、海軍によるパフォーマンス、海水浴 参加各団体のパフォーマンス披露	
3月23日（日）	FHCP2008	
	軍用船乗船体験、海岸清掃活動 ブース別ワークショップ活動、アドベンチャーゲーム、海水浴 参加各団体のパフォーマンス披露	
3月24日（月）	FHCP2008	
	閉会式	
	バンコクへ移動 FHCPボランティアスタッフとのお別れ夕食会	バンコク
3月25日（火）	バンコクにて解散	

For Hopeful Children Project (FHCP) 2008概要

FHCPは、第2回「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年Mr. Visit Dejkumtornが代表を務めるボランティアグループ「Fund for Friends」が実施するプロジェクトで、今年で18年目を迎えます。「東南アジア青年の船」事業タイ事後活動組織（ASSEAY Thailand）が後援し、タイ既参加青年も多く協力しています。対象は、「希望あふれる子どもたち（Hopeful Children）」と呼ばれる社会的に恵まれない状況にある、孤児・ストリートチルドレン・被虐待児など、施設で保護・治療を受けている子どもたち、また、視覚・聴覚障がい、肢体不自由などの身体障がい、精神・知的障がいをもつ子どもたちです。このプロジェクトでは、物質・教育的な制限のため、競争社会でのチャンスが少ないとしても、子どもたちがプロジェクト参加を通し、自分たちを思う人の存在に気づき、さらには自信をもち、競争社会でしっかり成長するきっかけとなることをねらいとしています。

～タイ王国・スタディツアーに参加して～

渡邊　千尋

本スタディツアーで私は日本文化を伝えることを通して、タイの子どもたちに生きる楽しさを再発見してもらいたいと思い、参加を決意しました。また日本人の私たちだからこそできることをしたい、具体的には折り紙、よさこいに挑戦したいという気持ちがありました。

ムーバーンデックとタンマヌラックの2つの施設では、普段の子どもたちの生活を垣間見ることができました。子どもたちは大自然の中でのびのびと遊び、自立しているだけでなく、お互いに助け合いながら、年上の子が小さな子の面倒をみて生活しているのが印象的でした。FHCPでは、海水浴、ワークショップ、パフォーマンスなど企画が盛りだくさんでしたが、その中でも私は折り紙をしたことが一番印象に残っています。タイの子どもたちは折り紙を取り出すと、興味津々で、みんな手先が器用で、教えるというよりは一緒につくりました。出来上がったときの子どもたちの表情は今も鮮明に覚えています。

参加をする前は、言葉が通じないことがとても心配でしたが、実際子どもたちとはカタコトのタイ語と表情と動作でコミュニケーションをとることができ、困ることはありませんでした。「しっかり目をみて語りかければ伝わる」 コミュニケーションで一番大切なのは気持ちだという単純なことを再確認した瞬間でした。「微笑みの国」で私はたくさんの笑顔にめぐりあい、子どもたちの笑顔は未来につながっていると実感しました。彼らの悲惨な過去は変えられないけれど、未来には希望をもって生きているということを五感で感じることができました。スタディツアーに参加して、私も少しは彼らの希望にあふれた未来をつくる手助けができていたら幸いだと思いました。

タンマヌラックにて子どもたちと（筆者左端）

今回のすばらしい経験をどう自分なりに還元していくか考え続けています。たくさんの人がくれた優しさと希望に対し、今後私たちが、こうしたプログラムにかかわること、多方面でいかしていくことが最大の恩返しなのではないかと思います。まずは、今年の教育実習で「国際交流と媒介言語としての英語」という方向性で、今回のスタディツアーで得た希望と夢を少しでも形にして還元していきたいです。また、私も毎日いきいきと希望を持って生きていきます。

FHCP終了後、3日間を共に過ごしたボランティアと

日タイ2か国語で紙芝居を朗読する参加者
（日本人・左手前とタイ人・左奥）

「スマイル&コミュニケーション」

日本青年国際交流機構
会長　大河原　友子

4月より前田中南欧子会長に引き続き、新会長に就任いたしました。私は第14回「東南アジア青年の船」に乗船し、平成13年度「国際青年育成交流」事業（ジンバブエ）には団長として参加、その後も事後活動の一環でさまざまな国際交流の経験をして参りました。

IYEOは50年の歴史を持つ内閣府の国際交流事業の既参加青年を中心とした同窓会組織で、日本全国の会員数は約1万5千人にも及びます。会員年齢幅の広さ、多種多様な職業や経験、多彩な才能を持つ会員のネットワークは私たちの誇れるものです。さらに、同事業の海外ネットワークは世界60数か国にも広がっています。このような大組織の会長という大任を仰せつかりましたことを大変光栄に思います。

新体制では「スマイル＆コミュニケーション」をキーワードに全国の会員の皆さんと、IYEOの活動を活性化していきたいと願っています。皆さんは交流事業を通じて異文化理解、国際的視野を広めながら協調し、共存していくことの重要性を学ぶ機会に恵まれました。IYEOの活動は、"Think Globally & Act Locally"（世界的視野を持ちながら地域で行動する）自らの経験をいかしながら各地域の仲間たちと多様な活動を形にできる絶好のチャンスだと思います。外国青年の受入れや交流プログラム、社会貢献活動、自主企画など豊富なアイディアと行動力が大いにいかせる場です。

今このメッセージを読んでくださっているのも「縁」です。しばらくご無沙汰していた会員の方もぜひこの機会にもう一度仲間に加わってみませんか。IYEOの活動は、楽しみながら自分を磨き向上させ、さらにそれが人のため、社会のためになるわけですから、一石二鳥、いや、かかわり方によっては三鳥にも四鳥にもなります。魅力的な仲間との出会いや貴重な経験の数々は相乗効果抜群！誰もが楽しみながらスマイルで活動できるすてきな場となります。

新旧の会員たちが、地域、年代、職業や参加事業を越えてコミュニケーションを良くしながら活動すること。そして時代に即した社会のニーズに適応できる組織へと発展していくことを目標にかかげ、皆さんと共に一丸となってがんばっていきたいと思います。

この場を借りて内閣府及び、(財)青少年国際交流推進センターの日頃のご協力に対し感謝申しあげます。最後に、皆様のご健康とIYEOの発展を祈願いたしまして新任の挨拶とさせていただきます。

日本青年国際交流機構活動方針

IYEO Aims

「共生社会の精神に基づく国際協調を目指して」

Towards Global Harmonization Based on the Spirit of Cohesive Society

1. 相互理解を深めるための自己研鑽を図ろう
   Let's enhance self development for deepening mutual understanding.
   国際社会において積極的に活動を行っていくために、自らを高める努力をしていこう。
2. 地域社会における国際交流活動を推進しよう
   Let's promote international exchange activities in the local community.
   国際交流事業に参加して得た成果をいかして、地域における国際交流活動を積極的に行い、地域の国際化と人材育成に貢献していこう。
3. 歴史ある国際交流団体としての社会貢献活動に取り組もう
   Let's initiate social contribution activities as an international exchange organization with a history.
   国際交流事業に参加して得た国内外のネットワークをいかして、社会貢献活動に積極的に取り組み、社会に広く影響を与えられる活動組織を目指していこう。

日本青年国際交流機構第24回全国大会長野大会
開催日：平成20年11月29日(土)～30日(日)　会場：立山プリンスホテル ※詳細は本紙p.14～15もご覧ください。

平成20年度　青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)一覧

ブロック	開催県	開催日(案)	ブロック構成都道府県	会場（予定）
北海道・東北	青森県	10月11-12日	北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島	青森県（調整中）
関東	山梨県	10月18-19日	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨	山梨県甲州市　かつぬま町ぶどうの丘
北信越	長野県	11月29-30日	新潟・長野・富山・石川・福井	長野県大町市　立山プリンスホテル
東海	三重県	9月13-14日	静岡・愛知・岐阜・三重	三重県伊賀市　もくもくファーム
近畿	滋賀県	1月31日-2月1日	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山	滋賀県近江八幡市　グリーンホテルYes近江八幡
中国	山口県	8月9-10日	鳥取・島根・岡山・広島・山口	山口県柳井市
四国	高知県	1月24-25日	徳島・香川・愛媛・高知	高知県安芸郡馬路村
九州	福岡県	6月14-15日	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄	福岡県宗像市　神湊スカイホテル

※詳細はこちらでもご覧になれます。 http://www.iyeo.or.jp/ja/local/index.htm

第1回青年の船40周年のつどい

我々の第1回青年の船が晴海を出港し、東南アジア７か国及び沖縄を巡って神戸に帰国してから、今年で40周年を迎えます。

そこで、これを記念して、各班1名からなる実行委員会を組織して、「第1回青年の船40周年のつどい」を右記により企画いたしましたので、各班お誘い合わせのうえ、奮ってご参加されますようご案内いたします。

なお、正式な案内状は7月下旬に、つどいの事務局から発送する予定ですが、つどいに対するご要望やご意見等がございましたら事務局までお寄せいただければ幸いに存じます。

平成２０年5月吉日

記

日　時　平成20年10月25日(土)
午後1時から5時

会　場　国立オリンピック記念青少年総合センター
〒151-0052　渋谷区代々木神園町3-1

第1部　１３：００～１４：３０
セレモニー・記念撮影

第2部　１４：３０～１７：００
パーティ

事務局　〒169-0074 新宿区北新宿1-30-30-601
電話・ファックス　03-3361-8390
高石　喜美子　第1回青年の船実行委員会事務局

第14回「東南アジア青年の船」事業20周年記念同窓会報告

第14回「東南アジア青年の船」事業
大河原　友子

希望に満ち溢れながらにっぽん丸にて晴海ふ頭を出航した懐かしい日から、20年という月日が流れました。14回SSEAYP（「東南アジア青年の船」事業）の仲間たちの結束は強く、昨年の7月シンガポールでのリユニオンを皮切りに、8月に日本、11月にタイ、12月にフィリピン、今年に入り3月にマレーシア、次は12月にラオスで計画中…という具合に現在進行形です。

昨年8月31日、日本でのリユニオンには、アセアンのみならず世界中に在住している仲間が、国外32名、日本人PY（参加青年）と管理部合わせ31名、家族などを含めると総勢78名が当時の参加国である全7か国から九段会館に大集合しました。

まず始めに、惜しくも他界されてしまった故神津船長、NLs（ナショナル・リーダー）、PYs（参加青年）に黙祷を捧げ、その後、昨年までウルグアイの大使であられました久山慎一管理官にご挨拶をいただき、懐かしい写真のスライド上映、各国からのプレゼンテーション、社会貢献活動に役立てる寄付金を集めるためのラッフルゲームなどを行いました。各国から持参した品々を基に行われたゲームでは、私たちの同期生であられる秋篠宮紀子妃殿下にラッフルチケットを引いていただきました。参加者全員がさまざまなプレゼントを手に、楽しみながら社会貢献活動ができたことで皆大満足でした。プログラム中の楽しいエピソード、各国での貴重な体験、船酔いなどで大変だったことetc 懐かしい話から近況まで数々の話に花が咲きました。20年経った今、それぞれのPYたちは各分野でリーダー的存在となり、それぞれの社会の中で大切な役割を担っています。参加者一人ひとりにとってターニングポイントとなったSSEAYPの経験は、どのような立場になろうとも、いつまで経っても私たちの「心の宝物」であり続けるだけでなく、その友情や理解は年々深まり続けることを確信しました。

最後には大きな輪になり手と手を取り合い恒例の「にっぽん丸」ソングの大合唱となりました。住んでいる国、立場、日々の生活は違ってもSSEAYPという貴重な共通体験をした友情の絆は固く20年という時間や空間をワープして皆がひとつになりました。

次の日には、ＮＬの足立文彦先生も引き続き参加してくださり、総勢45名で鎌倉へ行きました。長谷観音で大仏を見学し、お好み焼きを作りながら食べ、海岸に行って記念の「20」を人文字で作り記念撮影、鶴岡八幡宮では結婚式を見るチャンスにも恵まれました。

ここで皆さんにひとつの提案をします。各回で節目の年にリユニオンを開催する際に、懐かしい友人との交友を深めるという目的のみならず、社会貢献活動を組み込んだり推進したり、ネットワークを広めたり、子供たちを将来のPY候補生にするなど、ぜひすてきなアイディアを持ち寄り有意義な会を企画してください。たくさんメリットのあるリユニオンはIYEOの活性化にもつながるすばらしい事後活動のひとつだと思います。私にとって今回のリユニオンは"SSEAYP FAMILY"の一員でいられることの幸せをかみ締める良い機会となりました。リユニオン成功のために支援、協力してくださった多くの方々にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。 Thank you very much & SSEAYP forever!

グローバル・フォト・コンテスト 「関空旅博2008」への出展

2008年3月22日・23日開催

大阪府青年国際交流機構
第17回「世界青年の船」事業参加青年　中野　聡美

■ 出展のきっかけ

「旅博でブース出展をし、グローバル・フォト・パネルを展示しようよ。」

関空とは私の勤務する関西国際空港、旅博は今年で4回を迎えた関西空港の一大イベントです。これまでは航空会社や政府観光局が出展の中心。ボランティア団体の参加は皆無で、わがIYEOが初となりました。一般の方にもわかりやすい素材を使って内閣府青年国際交流事業の認知度を上げたい、その気持ちで提案したところ、即座に大阪IYEOで実行委員会が立ち上がり準備を始めることとなりました。

■ スタッフとネットワーク

準備では、スタッフ募集が大変ではと思っていましたが、メーリングリストにて呼び掛けたところ思った以上に良い反響がありました。昭和42年度から平成19年度までなんと40年もの開きがある既参加青年が、2日間で13名も集まりました。この縦横のネットワークがIYEOの強みなのだなぁ、と感動しました。改めてスタッフの方々に御礼申し上げます。

■ 出展当日の様子

「懐かしいなぁ」声を上げて写真に見入る年配の方。「転勤してからなんとなく疎遠になって」「またマクロコズム送ってもらえますか」既参加青年で今は活動を休止している方も、やはり気になっているのです。きっかけさえあればまた活動を再開する可能性がある。大きなチャンスを提供できた、と感じました。

一方、事業を知らない方も「初めて知った」「何をするの？」と興味を持って写真を見ながら真剣に話を聞いてくれました。さらに私たち自身が説明することを通じてより事業への理解が深まりました。

なお、この2日間の来場者はなんと33,000人。この活動で少しでも事業の認知度が上がったことを期待し、来年も出展したいと思います。

※次の関空旅博は2009年3月28日(土)・29日(日)に開催予定です。皆さんのご来場・ご協力をお待ちしています。

第2回SWYAA国際大会（2nd SWYAA Global Assembly）東京開催

「世界青年の船」事業20周年を迎えるにあたり、SWYAA国際大会(Global Assembly: GA)を東京で開催します。

開催日程：2008年8月21日(木)～24日(日)
主　　催：日本青年国際交流機構、「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)
同時開催：「世界青年の船」事業事後活動協議会
テ ー マ：「既参加青年の社会への貢献」
参加人数：約100名（日本を含む各国・各回の既参加青年）
参 加 費：約40,000円（宿泊は都内ホテルを予定）

詳細はホームページで御確認ください→ **http://www.swyaa.org**

■スケジュール

8月21日(木)	参加者集合、オリエンテーション、開会式、歓迎レセプション
8月22日(金)	テーマ別社会貢献活動
8月23日(土)	事後活動協議会、都内オプショナルツアー
8月24日(日)	体験プログラム、評価会、フェアウェルランチ、解散

■お問合せ・お申込み先
swyaa_globalassembly@iyeo.or.jp
IYEO事務局：　齋藤　珠恵/田中　佐代子
IYEO運営委員：深作　光輝

「世界青年の船の森」プロジェクトをはじめとする社会貢献活動や文化交流プログラムが盛り沢山です！各国からの既参加青年も集まるリユニオンの機会です！！皆様のご応募をお待ちしています。

GAでは、社会的な貢献活動を地域もしくは世界規模で推進し、またそのような活動を達成するための方策を協議することを目的とすると同時に、各国の事後活動の状況を集約し、「世界青年の船」事業の成果を総括します。

※オプショナル・ツアー：にっぽん丸クルーズ(三重県四日市～横浜)P.16参照

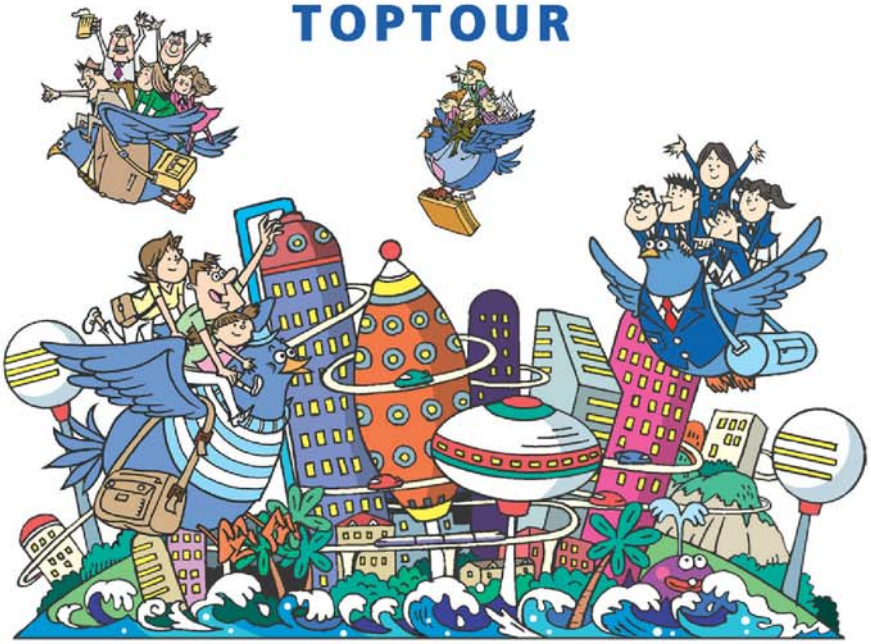
日本青年国際交流機構第24回全国大会　長野大会

本年の全国大会は、内閣府青年国際交流事業50年を記念する大会として位置づけられています。
環境をテーマに大会を実施します。皆さんお越しください。お待ちしています。

The 50th Anniversary
2006年1月31日
50

TOPTOUR

人が行き、人が集う、それが旅。



東急観光株式会社は創立50周年を機にトップツアー株式会社として生まれ変わりました。

旅は人と人とのコミュニケーションの架け橋
旅は人と自然が触れ合う地球の扉
旅は人と歴史をつなぐ時空間のトンネル
そんな旅を創造し、提案する［旅行インテリジェンス企業］
それがトップツアー株式会社

東急観光は50年にわたる第一幕からトップツアーとして新たな第二幕のステージに立ちました。
みなさまから愛される企業をめざして・・・・・・・

東急観光が社名を変えました。
トップツアー株式会社
TOPTOUR
国土交通大臣登録旅行業第38号 ◎ 日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 http://www.toptour.co.jp http://toptour.jp

◆日 程：平成20年11月29日(土)～30日(日)
◆会 場：立山プリンスホテル
◆住 所：〒398-0001 長野県大町市大町温泉郷2884-10
tel: 0261-22-5131　fax: 0261-23-2311
◆URL：http://www.tateyamaprince.co.jp/images/bath/bath-01.html

◆会場へのアクセス：
車　：長野自動車道　豊科IC→北アルプスパノラマロード40分
電車：ＪＲ大糸線　信濃大町駅下車　タクシー 13分
バス扇沢または日向山行大町温泉郷　下車　徒歩5分
送迎：あり　大町温泉郷バス停(15：00～18：00)

since 1884 Pioneer Of Cruise

Do Cruise 2008 「クルーズイヤー2008」の公式スポンサーとしてクルーズを盛りあげるイベント・キャンペーンに協賛しています。

MOPAS にっぽん丸

にっぽん丸のブティック「アンカー」でレジに立つ加藤の胸元を見て、ひとりのご婦人がポツリとつぶやいた。「あら、素敵なネックレスね」。そのひと言で、彼女の顔には満面の笑みが広がった…。「商品にお褒めの言葉を頂戴する時が、いちばん嬉しい瞬間なんです」。というのも、このブティックにディスプレイされている6割近くのアイテムは、実のところ彼女たち自身が企画してつくっているものなのだ。「昔は、お客さまが声をかけてくださったり、名前を覚えていただいたりすることが、仕事に取り組む励みになっていました。でも今は…」ブティック一筋に勤務して11年目になる加藤にとってのモチベーションは、提供する商品への"お客さまのひとこと"によって向上するのだと言う。「お褒めの言葉だけではありません。時には耳の痛いご忠告もあります。でも、そんなお言葉の一つひとつがより良い商品づくりのヒントになるのです」。結果としてそれは、お客さまの船旅の証しとしていつまでも残っていくことになる。おもてなしのあり方は「いろんなカタチがあっていい」と加藤は言う。だからこそ自分たちは、商品を通してお客さまの心に触れたいのだと。

NIPPON MARU

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

夏休み 古都鎌倉クルーズ ～マジックファンタジーin～にっぽん丸 名古屋発着
名古屋→横須賀→名古屋
2008年7月29日(火)～7月31日(木)　78,000円

夏休み 横浜ワンナイトクルーズ
横浜→横浜
2008年8月20日(水)～8月21日(木)　45,000円

横浜／小樽クルーズ 横浜発・小樽着
横浜→小樽
2008年8月25日(月)～8月27日(水)　66,000円

飛んでクルーズ北海道。 小樽発着
小樽→利尻島→網走→礼文島→小樽
2008年8/27、8/31、9/4、9/11発の各5日間　128,000円

初秋のサハリンクルーズ 小樽発着
小樽→コルサコフ→小樽
2008年9月9日(火)～9月11日(木)　84,000円

南米と南洋の楽園クルーズ 横浜発着・神戸発着
タヒチ、イースター島、ペルーなど海外9カ国14港を巡る68日間
2009年4月3日(金)～6月10日(水)　1,980,000円

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームＣ１室を２名でご利用の場合の大人お一人様(全食事・イベント付)の旅行代金です。※：各種のコースがございます。

商船三井客船　〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル5F MOPASは商船三井客船の登録です。

お問合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。　クルーズデスクフリーダイヤル 0120-791-211　http://www.mopas.co.jp

にっぽん丸クルーズのお知らせ

僕らのために船が出る！

実施日：平成20年8月19日（火）～ 20日（水）
航　路：四日市港（三重県）～横浜港（神奈川県）

■主催
日本青年国際交流機構（IYEO）
（財）青少年国際交流推進センター

■クルーズ日程

日付	時間	スケジュール	食事
8/19（火）	13:30	受付（三重県四日市港）、乗船	
	17:00（予定）	四日市港発 船内イベントや着席ディナーをお楽しみください。	
8/20（水）	10:00	横浜港着岸	
	11:30	下船後、解散	

「内閣府（総理府・総務庁）青年国際交流事業」50年を記念し、日本青年国際交流機構（IYEO）と（財）青少年国際交流推進センター共催で、この夏、にっぽん丸全船貸切クルーズを開催します。船の事業参加者、航空機の事業参加者、ご家族、ご友人等私たちのためだけに「にっぽん丸」が大海原を駆け抜けます。同窓会・同期会なども大歓迎！「久しぶりに仲間に会える！」、「懐かしい『にっぽん丸』で一夜を過ごせる！」、そして「大切な人に『にっぽん丸』を紹介できる！」またとないチャンスです！

■参加料金
おひとり￥39,000～
※夕食（着席フルコーススタイル）1回、朝食1回、軽食1回、1泊分宿泊代金を含みます。
※IYEO会員でない方が参加を希望される場合は、IYEO会員の紹介が必要です。

船内では様々なイベントが皆様をお待ちしています！

- 「にっぽん丸」操舵室ツアー
- 星空観察会（雨天中止）
- グローバル・フォト・コンテスト写真展
- 映画/事業記録上映会
- ドルフィンホールでのダンスナイト
- 各国文化体験（民族舞踊など）
- 事業活動報告
- 「内閣府（総理府・総務庁）青年国際交流事業」50年の歩み展

■問い合わせ・連絡先
e-mail: nipponmaru-cruise@iyeo.or.jp
IYEO事務局
IYEO副会長　大橋玲子
IYEO事務局長　本田温子
IYEO事務局次長　田中純子

今月の表紙

タイトル：The joy of dancing（ダンスを楽しむ）
撮 影 者：Ana Maria Raad (SWY 9, 1996, エクアドル)
撮影場所：インド
ひとこと：2005年に撮影した写真。インドの子どもを取り巻く貧しさに驚かされました。子どもの衣類や髪を見れば分かりますが、不安定な状況で生活しているのに、この子は自分の身の上のことなどすっかり忘れて、ニコニコしながら音楽やダンスを楽しんでいます。

◀第20回「世界青年の船」事業グループ活動で、日本参加青年と外国参加青年が一緒に餅つきを体験

◀タイ王国・スタディツアー訪問先でプレゼントを待ちわびる子どもたち

編集後記

A4サイズになったマクロコズムはいかがでしたか？みなさんにぜひ楽しんでいただきたいと思いながら日夜編集に励んでいます。これからもよろしくお願いします。（ふ）

MACROCOSM 5月号 vol.82

2008年5月30日発行
編　集　マクロコズム編集委員会
発　行　（財）青少年国際交流推進センター
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町 2-35-14 東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767　FAX: 03-3639-2436
e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp
URL: http://www.centerye.org/ (CENTERYE)
http://www.iyeo.or.jp/ (IYEO)
編集協力　内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構（IYEO）
定　価　200円 本体191円
印刷所　株式会社デックス
TEL: 03-3400-8089　FAX: 03-5469-5270